

作物名：キャベツ

病害虫名：菌核病（病原：*Sclerotinia sclerotiorum*）



結球部の腐敗症状



被害株上に形成された菌核

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・結球を始める頃に発生がみられ、地面に近い下葉の葉柄基部近くに水浸状の病斑ができ、これが結球部に進展し、結球部の一部あるいは全体を腐敗させる。
- ・この腐敗は軟化して進む場合もあるが、軟腐病のような悪臭はない。
- ・発病部には白色綿毛状のかびを生じ、腐敗した結球部の表面や内部には黒色でネズミの糞状の菌核がみられる。病徴の末期には必ず黒色の菌核が形成される点で、他の病害と区別できる。
- ・本病はほ場で発病して被害を及ぼすほか、輸送中や貯蔵中にも発病するため被害が大きい。

2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は菌核の形で土中で生存し、伝染源となる。
- ・菌核は菌糸が組織状になった耐久体で、環境に対する抵抗力が非常に強く、土中で一般には2～3年、場合によっては4～6年も生存することがある。
- ・菌核から形成された子のう盤から子のう胞子が飛散して植物体に感染する。子のう胞子は発芽して菌糸を伸ばし、茎葉の付傷部や生活力が衰えた下葉などから侵入し発病させる。
- ・子のう胞子の飛散距離は数百mといわれている。
- ・本病菌は極めて多犯性で、きゅうりやいちごをはじめ多くの作物（64科225属361種以上）を侵す。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で子のう菌類に属し、菌核及び子のう胞子を形成する。菌糸の生育適温は20℃前後である。
- ・子のう盤の形成には気温15～20℃で、湿度95～100%の多湿が好適条件である。そのため、春と秋に大雨の後に20℃前後の気温が続くと、菌核から子のう盤が形成され子のう胞子を飛散させるため発生が多くなる。
- ・作型としては、秋まき春穫り栽培が最も発生が多く、次いで夏まき秋穫り栽培であり、春まき夏穫り栽培では発病適温を超えているため発生は少ない。

4 防除対策

- ・発病株は菌核が形成される前に抜き取り、土中深く埋没してほ場に菌核を残さないようにする。
- ・菌核を死滅させるため、天地返し等により菌核を地表から5cm以上深くに埋め込む。
- ・結球開始期から予防的に薬剤散布を実施する。散布の際は、感染部位である株元に十分に薬液がかかるようにする。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編3-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編3（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影